

## 一般社団法人日本材料科学会発足にあたって

岩森 暁

一般社団法人 日本材料科学会 代表理事・会長 (東海大学 教授)

(2019年7月18日受理)

2019年4月1日に一般社団法人日本材料科学会を設立しました。同年5月31日付けで日本材料科学会を解散し、6月1日付けで一般社団法人日本材料科学会が誕生いたしましたこと、ご報告いたします。

日本材料科学会は昭和38年に誕生し、今年で56年になります。日本材料科学会の機関誌「材料科学」をもとに歴史を振り返ってみますと、1964年1月に発行された第1巻第1号の「発刊の辞」において、当時の会長、森谷太郎先生は「材料に対して微視的性質と巨視的性質との関連を通して多角的総合的研究を行うことによって材料研究に新しい学問体系を与え、材料科学を確立することは我々材料研究者の今日の使命であろう。」と述べられています。このような材料科学に従事する研究者の姿勢は56年の時を経た今日においても変わらないと、共感しております。その後、昭和61年には創立25周年の記念事業が企画されており、この中で法人化へ向けての基金の設立がなされました。当時の会長であられた坂田亮先生は、1989年12月号の「材料科学と私の歩み」において、「募金趣意書通りの法人化をしていただきたく、次期の会長、理事諸先生方に切にお願い申し上げます。」と述べられていました。その後の歴代の会長をはじめとする諸先輩方から「早く法人化をすべきではないか」といったご意見を数多くいただきました。

小職が副会長であった当時の久保内前会長のときに法人化の時期について意見交換を行い、小職が会長に就任してから本格的な法人化の作業を法人化検討委員会を組織してすすめることになりました。一般社団法人化に伴い、まず学会の収益を改善すべく、収益事業の強化をすすめると同

時に、法人化後の定款や各種規定の改定を行ってまいりました。理事会のメンバー、とりわけ法人化検討委員会の理事の方々には多大なるご尽力を賜りましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

一般社団法人化に伴い、組織も変更しています。旧組織において学会を運営する組織である理事会は執行役員会と名称を変えることで、それぞれの役員が担当職務について責任をもって執行していただくことになりました。また各種企画委員会も名称変更を行っています。学術講演大会を企画・運営する第1企画委員会は学術講演会企画委員会、材料科学基礎講座を企画・運営する第2企画委員会は講演事業企画委員会、学生を中心とした若手研究者の発表・交流の機会を企画・運営する第3企画委員会は若手育成委員会、とすることで、その役割を明確にする名称にしています。

これら組織の変更は、会員のサービスの向上を第一に考えたものでありますが、より多くの方々为本学会に興味をもっていただき、参加していただけるような企画を立案し、実行していきたいと考えております。そのためには皆様からのご意見が重要であり、多くのご意見をいただければ幸いです。

日本材料科学会は一般社団法人化することで新たな時代を迎え、今後も会員の皆様へのサービスの向上、会員の増強などに積極的に取り組んでまいります。今後ともご支援のほどお願い申し上げます。

最後になりますが、本学会を長年支えていただきました株式会社裳華房の吉野社長、先代・先々代の社長、および裳華房の皆様にご礼申し上げます。

## 一般社団法人設立記念式典および設立記念交流会 報告

庶務理事 三友信夫\*、本橋光也\*\*

\*日本大学, \*\*東京電機大学

(2019年9月5日受理)

2019年5月23日(木) 関東学院大学 KGU 関内メディアセンターにおいて、一般社団法人設立記念式典が行われました。はじめに、岩森暁会長から開会の挨拶があり、引き続き、記念講演として関東学院大学特別荣誉教授の本間英夫先生から「産学連携と創造の軌跡」と題して約1時間お話を拝聴させていただきました。本間先生が学生の頃から現在に至るまでに体験してこられた、研究開発、当時の社会情勢、苦楽をともにしてきた数多くの人々との人間ドラマ、産学連携の歴史と将来への願い、さらに、当学会との関わりや当学会へ期待すること、等についての内容であり大変興味深いものでした。長く学会に関わってきた方々にとっては、歴史を再確認するとともに、初心を思い出すことができていると思います。また、若い人たちにおいては、先人たちがいかに情熱を持って研究開発に取り組み、そして、現在の技術の礎を創ってきたかを知ることになったことと思います。非常に貴重な体験をさせていただきました。

記念講演に続き、関内メディアセンターのハーバース・ダイニングにて設立記念交流会が行われました。冒頭、岩森会長の挨拶の後、山下嗣人氏に学会から学会賞の授与を行いました。引き続き、津田健氏(顧問, 第13代, 2005-2009年, 23・24期会長)に乾杯の挨拶をしていただきました。その後、歓談の中、宮入裕夫氏(顧問, 第11代, 1997-2001年, 19・20期会長)、木村雄二氏(執行役員, 第14代, 2009-2013年, 25・26期会長)、本間英夫氏(関東学院大学特別荣誉教授)、高井治氏(執行役員)、末澤芳文氏(名誉会員)のそれぞれの方々から、学会での数々の思い出、現在および将来の学会のあり方など、大変有意義な叱咤激励の数々をいただきました。今後、学会をさらに発展させるための指針とさせていただきます。最後に、前会長の久保内昌敏氏(執行役員, 第15代, 2013-2017年, 27・28期会長)に閉会の辞を述べていただき、閉会いたしました。ご出席して頂きました皆様、ありがとうございました。



交流会での集合写真：(前列左から)本橋光也、張炳國、津田健、末澤芳文、岩森暁、山下嗣人、久保内昌敏、高井治、藤邨克之(二列目左から)尾之上さくら、神原陽一、平井慈人、折田政寛、渡邊充広、土佐正弘、本間英夫、大家溪、渡辺良祐、三友信夫(三列目左から)近藤崇博、香西博明、井上泰志、竹村進、浜村武広、吉田宗典、齋藤洋司、香取光臣、上村彰宏、梅津信二郎、井上浩徳、永井達夫、松本明彦(敬称略)

## 日本材料科学会 一般社団法人設立に寄せて

吉野和浩

株式会社 裳華房 代表取締役社長

(2019年7月16日受理)

日本材料科学会の一般社団法人設立に寄せて、お祝いの言葉を述べさせていただきます。

日本材料科学会は、森谷太郎先生を初代会長として昭和38年3月に設立され、翌昭和39年1月に学会誌『材料科学』（当時名称）の創刊号（写真1）が弊社を“発売所”として刊行されました。創刊号の編集後記には、「昭和38年4月、ゼロからスタートした会誌の編集も、相当の強行軍を余儀なくされはしたが、ともかく創刊号発行の大仕事を終え委員一同ほっと一息というところ」という文章がみられます。編集にあられた委員の一人の感慨ですが、“ゼロからスタート”という言葉の重さに、往時のご苦労が偲ばれます。

日本材料科学会と弊社とのつながりは深く、立ち上げ当初から学会事務局が弊社内に置かれ（写真2）、爾来50余年にわたり、微力ながらともに歩ませていただいたことを誇りに思っています。

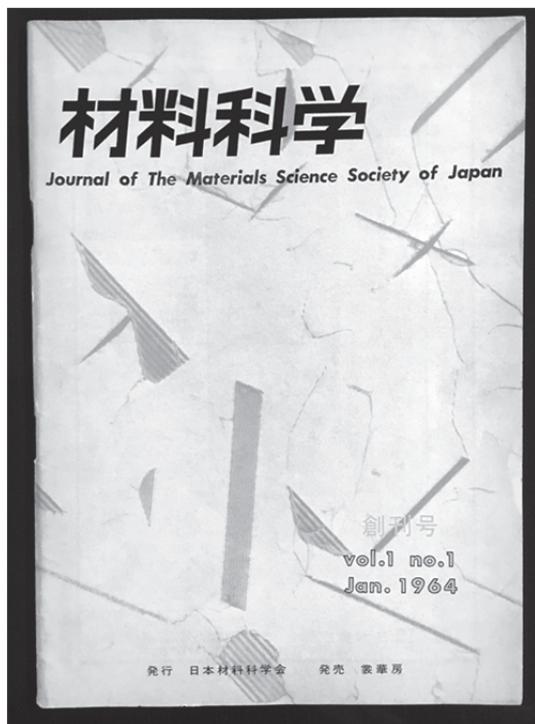


写真1 『材料科学』創刊号表紙

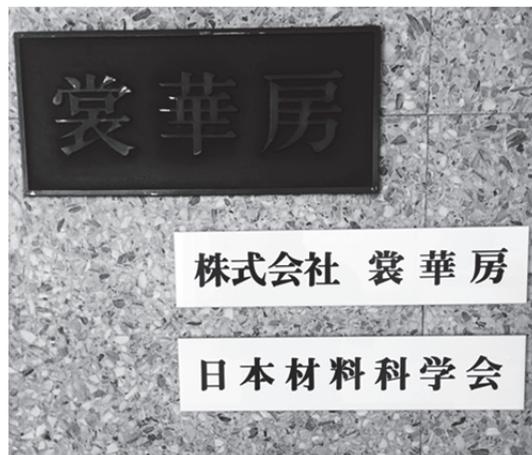


写真2 弊社 玄関のプレート

学会誌のみならず、「先端材料シリーズ（全25巻）」「新教科書シリーズ〈基礎編〉〈応用編〉（全15巻）」をはじめ、書籍の刊行につきましても、歴代の出版委員の皆様を筆頭に数多くの先生方にたいへんお世話になり、またひとかたならぬご厚情を賜りましたこと、ここにあらためて深くお礼申し上げます。

理工学書の版元として、昨今の学生の理工系離れ（理工系のみならず、むしろ“勉強離れ”ではないかとの声もありますが）は、社業を通して日々痛感しているところです。また社会的にも、理工系学問の研究環境が厚遇されているとは言い難い状況と思われ、貴学会を取り巻く環境にもたいへん厳しいものがあるだろうことは容易に察せられます。そういった環境の中で、このたび貴学会が一般社団法人として認可されたということは誠に慶賀の至りであり、初代森谷会長から岩森暁現会長に至る数多くの委員・関係者の皆様のたゆまぬご努力に深甚なる敬意を表します。これを機に、日本材料科学会がよりいっそうご発展されることを祈念するとともに、これからも科学立国を標榜するわが国の礎を担い、末永くご貢献くださいますことを大いに期待いたしております。

## 法人化に思うこと

宮入裕夫

東京医科歯科大学 名誉教授

(2019年7月11日受理)

本学会の設立、1963年は多くの学会の中でも古く、この度の学会法人化には、学会員の一人として心から嬉しく思っている。現在では創立当初の先生方を知る会員も大変少ない。それだけに長い歴史を積み上げてきたことを自負している。創設当時の先生のほとんどが他界され、当時のことを振り返ると、この度の法人化は実に感慨無量である。自分の学会への入会は、先輩の上司の勧めであった。そのような中で、多くの諸先輩の先生方が、この学会を一人前の学会に育て上げようとその礎を築き上げてきた。しかし、当時法人化のバリアは実に高く、学会の基金は最低でも2000万円であった。会誌発行も当初は決して順調なものではなかった。また企業会員の方々が勤務中に学会の会議に出ることも許されず、会議開催なども夕方6時からか、当時はまだ週6日制で、よく土曜日の3時か4時頃であった。学会でご一緒させて貰った先生方も材料関連ではそうそうたる方で活気に満ちたもので、自分自身も学ぶものも多かった。しかし、大学や公的研究所の仲間だけでは、企業ニーズの探求も難しく、研究テーマも手探りであった。そのために産業の発展に繋がる画期的研究なども難しく、学会の基金集めなども至難の業であった。たまたま学会創立25周年記念事業の一環として、基金集めが始まった。当時日本電気(株)(NEC)の植之原道行重役さんの精力的な働きかけは今でも忘れられない。その時集めた基金の50%以上が大手電機メーカー5社からで、電機メーカーもこれから材料の研究へとシフトしようとしていた過渡期であった。基金集めが実現し、法人化も順調に進めそうだったが、そこにはまた学会員数が最低でも1000名程度必要であった。これも確か900名近くまでが精一杯であった。こんなことを振り返っていると、最近の学会の環境は実によくになっている。それは学位制度の大幅な緩和であった。学位取得者は論文の提出が必須事項であるので、指導教官の苦労も大変だ。しかし、過去を思うと、現在の学会は実に学会を拡大させる、絶好のチャンスでもある。是非、本学会を活用して、研究者同士の仲間を増やし、共同研究といった形で、ユニーク発想に基づいた、世界を驚かすような新しい研究を是非展開してもらいたいと思っている。

E-mail : miyairi@w8.dion.ne.jp

## 法人化に寄せて

津田 健

東京工業大学 名誉教授

(2019年7月9日受理)

一般社団法人設立の報をうけ、その実現に尽力なさった会長をはじめ、役員の方々に敬意を表したい。

本会の法人化が会誌に明記されたのはVol.26, No.7(1989)の創立25周年記念特別号における、当時の会長である坂田亮先生の挨拶記事であろう。記事によると記念事業として、法人化、会誌月刊化、会員拡充、研究会等活性化などが企画されたとある。事業の一環として行われた募金活動によって寄せられた金額は特別会計なる会計費目で管理することとなり、現在も存続している。この財産は主として‘法人化’と‘会誌月刊化’に使用するものとされた。当時わたしは個人会員ではあったが、25周年、法人化などについては頭の片隅にもなかった。今にして思うと恥ずかしい限りである。その反省の意味も込め、この機会に法人化について少し勉強してみた。本会設立25周年の1989年当時、民法の下で設立されていた公益法人の設立が、設立のための手続き、資格等から大規模の学協会であれば、簡単にはクリアできない高い壁となっていたが、今では規模にかかわらず多くの学協会が法人化が実現している。そのきっかけは2000年の行政改革大綱の閣議決定、その後の議論による2006年のいわゆる改革3法の国会承認によることわかった。このような動きが始まる10年以上も前の1989年に法人化を検討し始めた当時の本会の役員の方々の意識の高さに改めて尊敬・敬意の念を抱かざるを得ない。

さて、法人化のメリットは何と云っても、任意団体と異なり、法人格をもつ団体として社会的信用力がつくことであろう。ある方が法人化について、「実際に一番効果が出る点は、‘自分自身の覚悟が決まる’ことである。覚悟が決まることで、意識、さらには行動が変わることであろう」との指摘を目にした。今後の本会の運営に際し、常に心に留めておくべき点かと思う。一方で、今までは省略できた手続き、義務が必要となってくるであろう。これらすべてを理解したうえで法人化のメリットを最大限生かして、すでに実行に移されている企画もあるが、25周年のときに検討したいいくつかの企画の実現も含め、本会がますます発展することを祈るとともに、微力ながら一会員として今まで以上の協力を続ける所存である。

E-mail : ktsuda@mtf.biglobe.ne.jp

## 本会の法人化を祝して

木村雄二

第 25-26 期会長（工学院大学）

（2019 年 7 月 23 日受理）

日本材料科学会は昭和 1963 年（昭和 38 年）3 月 23 日に設立されて以来、広く材料工学分野を対象とし、材料科学に関する理論の進歩および技術の向上・発展に寄与することを目的に活動してまいり、もうすぐ 60 周年を迎えます。

本会の発足は、難産であったようで、そのいきさつは設立総会の経過報告のなかで、末沢教授により報告されました。それは、京都に本部を置く「日本材料試験協会（現日本材料学会）」との関係にあり、同協会名と本学会名との類似、ならびに研究領域の重複などに関連しての質問があり、それに対する回答をするための会合が設立総会に先立って東京（蔵前工業会館）にて行われ、其の結果、両学会は“お互いの立場、特長を理解、尊重し、互いに手を取り合っていく”との完全な了解点に到達したとのことであった。

その後、坂田亮先生（慶應大）が第 7 代（12-13 期）会長を務められた時代に、財政基盤を確立することが当学会再建に必須の急務と考え、会長就任直後の昭和 60 年（1985 年）6 月、まず「将来計画懇談会」を発足させ、引き続き「創立 25 周年記念事業計画」と「募金趣意書」を作り、昭和 61 年（1986 年）5 月から目標額は 3000 万で募金を開始した。募金委員長には前東工大学長斎藤進六教授、募金副委員長兼実行委員長には植之原道行副会長（日電専務、後に副社長）がなった。書き尽くせないほどの多くの方々の尽力により、会長任期の最後の年、昭和 64 年（平成元年）

（1989 年）5 月には 3200 万円ほどが集まり、募金費用や記念式典費用等を除いた約 2000 万円が、基本財産として蓄積された。記念事業として企画したことは、法人化、月刊化、支部設立、会員拡充、研究会等活性化、記念出版、事務局整備、会員名簿発行、記念式典等であった。

以来 30 年、支部設立、研究会等活性化を実現しながら、法人化への努力はずっと受け継がれてきたが、岩森暁現会長の強力なご指導により、この懸案事項がようやく解決する運びとなりました。このように 30 年来の悲願ともいえる法人化が実現できたことを、心よりお慶び申し上げますとともに本会の今後の益々の発展を祈念いたします。ただ、坂田先生がお元気である内に法人化の実現をご報告出来なかったことが、少し心残りではありますが、

## 一般社団法人化へのお祝いと 今後の発展への期待

久保内昌敏

東京工業大学 物質理工学院応用化学系 教授

（2019 年 9 月 3 日受理）

まずはこの度の一般社団法人化に対して、お祝い申し上げます。当学会が 25 周年の際に立てた法人化の目標が、50 周年を過ぎたここへ来てやっと実現されたものであり、25 周年の際の寄付も法人化が最大の目的であった。先輩方が残されたこの寄付金が本来の目的で使えることになった。様々な障害を乗り越えて法人化を実現された現会長岩森先生をはじめとする執行部の皆さんに敬意を表する。

私が前任の当学会会長であった際にも、法人化を行うべきとの意見を多数受けていたのだが、当時の状況では会員数の減少を何とか食い止めることが急務で、法人化のためには、これを増加に転じて法人化しても十分に持続性のある状況にすることはまだまだできておらず、法人化に踏み切ることのできる状況ではないと判断していた。

もちろん、その前から会員数の挽回は努力を重ねていたものであり、学生会員の増強や学術講演会登壇における会員制限、時限付き分科会による新分野会員の獲得、地方支部の整備再編による地方会員の獲得を進めた。さらには国際会議開催などを通じて活性化し、学会誌の編集の見直しをはじめとする各学会活動費の見直しを通じて、学会の体力回復を進めてきた。まだまだ、会員数もそれに伴う学会費の収支も安定的な運営ができるほどまでには増加していないようではあるが、種はできたようであるので、今後の展開に期待したい。

日本材料科学会は、材料科学に関する広い範囲を守備範囲とする。材料は半導体から構造材料、生体材料、さらには情報を駆使した材料の開発手法など、今や特化した分野で議論されているものが多い。一方で、このようないろいろな分野の材料科学者、技術者らが自由に情報交換できる場として本会の意義があろうと考える。法人化を機に、さらに多くの分野の優秀な材料科学者、技術者が集い、情報交換による相乗効果が見えるようになればと期待している次第である。

E-mail : [mkubouch@chemeng.titech.ac.jp](mailto:mkubouch@chemeng.titech.ac.jp)

URL : <http://www.chemeng.titech.ac.jp/~tklab/index-j.html>

## 祝辞

加藤隆史

東京大学 教授, 公益社団法人 高分子学会 会長

(2019年6月17日受理)

この度は、貴学会が一般社団法人化し、新たな発展に向けて歩みだされましたこと、誠にありがとうございます。1963年に設立以来56年の歴史を重ね、新しい歴史を築いていかれる姿に感服いたすとともに、貴学会の一層のご繁栄を心より祈念申し上げます。

高分子学会は、学会内での議論を重ね2012年に公益社団法人に移行しましたが、公益法人移行後も、学術文化の発展や人材育成などをとおして、社会の発展に寄与しております。貴学会においても一般社団法人化に伴い社会的信用が増すことになり、引き続き、貴学会の目的が達成されることと存じます。

材料の科学および工学の理論の進歩および技術の向上に寄与することを目的として活動されている貴学会において、多方面にわたり高分子材料についても取り上げていただいております。さらに、貴学会の研究会がとりあげられるスマート・マテリアル、マテリアルズ・インフォマティクス、そして、バイオマテリアルも、高分子材料とのむすびつきも強く、両学会がこの分野で材料の科学と工学の発展に寄与できればと思っています。

高分子学会では、高分子の刺激応答性や自己修復性などを有するスマート・マテリアルに関しては、インテリジェント高分子として学会誌、論文誌、研究会でも取り上げてきております。また、マテリアルズ・インフォマティクスでも、学術講演会や研究会が取り上げてきております。

このようなスマート・マテリアルやマテリアルズ・インフォマティクスなどの特定分野に限らず、高分子学会が主催する年次大会、討論会、ポリマー材料フォーラムなどで、貴学会の会員の皆様にご発表いただき、高分子と融合する材料全般での分野横断的な取り組みができればと思っています。

そして、材料分野での発展に向けて、これからも、両学会がそれぞれの活動をとおして、学術や産業の発展に貢献できればと願っております。

最後に、今後ますますのご発展と貴学会会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。あらためて、貴学会の一般社団法人化をお喜び申し上げます。

E-mail : kobunshi@spsj.or.jp URL : <https://www.spsj.or.jp>

## 祝辞

橋本和明

一般社団法人 色材協会 会長

(2019年7月9日受理)

日本材料科学会は、1963年に材料科学に関する理論の進歩および技術の向上に寄与することを目的として設立され、それ以降56年間の長きにわたり、学会誌「材料の科学と工学」の発行、学術講演会、講座や講習会の開催を通じて日本の材料科学の進歩に大きな貢献をしてこられました。また、このような日本材料科学会の活動の重要性が認められ、本年4月1日より一般社団法人として認可され、一般社団法人日本材料科学会として新たに発足することになりましたことは誠に喜ばしいことで、心よりお祝いを申し上げます。

日本の科学技術やモノづくりの発展に、材料科学がいろいろな意味でたいへん重要な役割を果たしてきたということは、周知の事実となっております。とくに素材・材料の製造・生産のところでは、日本には、世界に向けて簡単には公開できない材料製造に関する膨大な蓄積データがあります。これが世界No.1の日本のモノづくりを支えてきたと言っても過言ではありません。

日本材料科学会は、これまでの化学結合での素材・材料の枠組みである有機材料、無機材料、金属材料とそれらの複合材料のほかに、横断的な幅広い視野に立ち、半導体や電子デバイス、スマートマテリアル、生体関連素材・材料などを含み、素材・材料の課題とその急所を的確に捉えて発展してきました。また、AI、IT時代を先取りするマテリアルズ・インフォマティクスやインフォマティクス・バイオマテリアルの研究会を立ちあげ、いち早く活動していることには驚きをおぼせません。さらに韓国との二国間での国際会議を毎年開催していることも特筆すべき国際的な研究活動であると思います。日本のモノづくりが、これまで通りに世界を牽引していけますように、また、私が会長を務めます色材協会としましても、今後の日本材料科学会を中心とする研究活動の成果に大きな期待を寄せております。

最後になりましたが、日本材料科学会のますますの発展を祈念して、私からの祝辞とさせていただきます。

E-mail : [kazuaki.hashimoto@p.chibakoudai.jp](mailto:kazuaki.hashimoto@p.chibakoudai.jp)URL : <http://www.shikizai.org/>

## 新たな出発に向けて

荒川一郎

公益社団法人 日本表面真空学会 会長

(2019年7月18日受理)

日本材料科学会が、一般社団法人として新たな出発をされたこと、お祝い申し上げます。材料の表面の科学、また真空装置を構成する諸材料の科学・工学という点で、日本表面真空学会は、貴学会と深く広範な関係を持って参りましたし、これからもその関係はますます強くなると思えます。貴学会が新たな体制で力強く発進されたことを大変心強く思いつつ、お祝い申し上げます。

学術組織としての「学会」の将来像は必ずしも明るいばかり言っていられない状況だと思えます。一つは、会員数の減少傾向で、その一因が人口の減少にあるのは明らかです。これまで、数十年に渡り日本の科学・技術・産業を支えてきた世代が引退していく一方で、若い層の参入数が限られているということだと思えます。この状況を踏まえて、これからの学会の在り方を模索していく必要があるでしょう。お上から示される様々な規制も、学会にとっては重荷になっています。学術団体としての法人であることを認識してもらい、その扱いをそれに相応しい合理的なものに整備してもらわなければなりません。もう一つ、学会誌の出版に関する環境も、著作権、open access、などがからんで、現在は過渡期にあると思えます。将来の学会誌・学術雑誌の在り方がどの様な所に落ち着くのか、見通しはまだ余りはっきりしていません。

その様な中で、日本材料科学会が勢いのある学会として新たなスタートを切られたことを大変心強く感じている次第です。日本表面真空学会も1年前に日本表面科学会と日本真空学会が合併して新しいスタートを切ったばかりです。明るい未来を見据え、これから活発な活動を展開していく決意をした仲間として一緒に進んでいきたいと思えます。学会の組織的な交流、また個々の会員の相互の交流を通して、協力を密にし、お互いに発展していくことを願っております。

## 一般社団法人日本材料科学会への期待

川合眞紀

公益社団法人 日本化学会 会長

自然科学研究機構 分子科学研究所 所長

(2019年7月22日受理)

このたびの一般社団法人日本材料科学会設立、誠にありがとうございます。日本化学会を代表して、心からお祝い申し上げますとともに、関係の方々のご努力に深い敬意を表します。

有機・高分子、無機、金属、半導体材料などの従来の分類にとらわれず、広く境界領域をカバーした研究活動を続けてこられた貴会への期待には大きなものがあります。

我々が直面している環境問題ははじめ、資源・エネルギー問題、気候変動など地球規模の課題は変わることなく続いており、2015年の国連サミットで採択された持続可能な開発目標(SDGs)の達成には、「材料の科学と工学」の貢献が不可欠です。

私ども日本化学会は、物質変換や物質合成を行う自然科学の一分野である化学を基軸とし、物理学、工学、生命科学、医学・薬学、農学分野などの学問分野と深い関係があります。それらすべての分野において「材料」は重要な基盤としての役割を果たしています。

また、日本化学会では、学術講演会である春季年会において21のセッションを設けていますが、材料分野では材料化学、材料の機能、材料の応用の3セッションにおいて、毎回多くの発表が行われております。また、化学関連分野全体を網羅する有機的な組織であるディビジョンの一つとしてナノテク・材料化学ディビジョンが研究活動を行っています。貴学会とは今後も幅広い分野で情報交換、連携できればと期待しております。

最後になりますが、日本材料科学会のますますのご発展をお祈りしますとともに、日本化学会との横断的な交流を積極的に推進させていただければ幸いです。

## 祝辞

竹中幹人

一般社団法人 日本ゴム協会 会長

(2019年7月31日受理)

このたび日本材料科学会が一般社団法人として新たに出發されるとのこと、日本ゴム協会を代表いたしまして心からお祝い申し上げます。

日本材料科学会は、昭和38年に材料科学に関する理論の進歩および技術の向上に寄与することを目的として創設されて以来、長年にわたり材料科学の分野において学術研究の振興と素材産業の発展に大きく貢献してこられました。特に、貴学会は特定の材料にこだわることなく、学際的な領域としての材料科学の分野を進展させるべくその材料科学の普遍性ならびにその応用についての学術および技術に関する最先端の情報の場として活発に活動されておられます。

またIoTやAIなどの進化が今後材料科学の分野に大きな技術革新をもたらすことは必然のことではありますが、貴学会はマテリアルズインフォマティク基礎研究会やインフォマティク・バイオマテリアル研究会などの研究会活動など先進的な取り組みをなされており、材料科学をリードする学会として、その動きには目を見張るものがあります。このような取り組みは貴学会の会員方々の努力と運営されていらっしゃる役員の方々の努力の賜物であるかと存じます。

未来には、エネルギー、資源、環境問題等に関して多くの解決すべき課題が山積しております。これらの課題を解決していくためには、材料科学の果たす役割はますます重要になってくことは必定であります。貴学会が今後ますますその課題解決の重責を担われて、日本の材料分野の学術や産業のみならず、日本の科学技術を先導する原動力として発展されることを祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

## 祝辞

黒田真一

マテリアルライフ学会 会長

(2019年8月5日受理)

一般社団法人日本材料科学会の設立に当たり、お祝いを申し上げます。

貴日本材料科学会は、1963年に任意団体として設立されて以来、材料の科学と工学に関わる理論・技術の進歩に寄与され、さらにこの分野の研究と教育に関する情報交換を活発に推進して来られました。その活動は、学会誌の発行、学術講演会、セミナーなどの開催にとどまらず、学術図書出版にも精力的に取り組まれ、多数の書籍を出版されました。このように、学術・教育に対して多大な貢献を果たしてこられたことに深く敬服いたします。また国際交流も熱心に進めておられ、特に、2014年から開催しておられるJapan-Korea International Symposium on Materials Science and Technologyは今年で第6回目となり、材料科学に関する総合的な国際会議として、国際的にも十分認知された会議となっていると伺っております。今後さらに日本材料科学会の国際性を高められることを期待しております。

貴日本材料科学会は、無機、有機、金属、半導体材料など、広く、かつ横断的視野に立って、材料科学の諸問題を扱い、材料の研究と開発の方向性を示して来られました。私どもマテリアルライフ学会も、有機、無機、金属などからなる素材・各種材料と構成物・製品、ならびにバイオマテリアル、古文化財など、多種多様な材料の耐久性、寿命予測と制御についての科学および技術の進歩をはかるうとして参りました。材料の開発・生産に当たっては、材料の初期性能に注目することは当然ながら、その使用過程における継時変化や材料としての使命を終えた後の環境負荷などにも留意することが重要だと思います。近年大きな問題となっている海洋プラスチックごみなどは、その典型的な例でありましょう。マテリアルライフ学会では、本年度より、マイクロプラスチックの生成機構を解明することを目的とした共同研究に取り組んでおります。このようなマテリアルライフ学会の活動成果が、貴日本材料科学会における研究と教育にお役に立つことを願っています。

最後に、一般社団法人となった日本材料科学会の益々のご発展を祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

E-mail : skuroda@gunma-u.ac.jp

URL : <http://materials-life.org/>E-mail : [office@srij.or.jp](mailto:office@srij.or.jp) URL : <https://www.srij.or.jp>

## 祝辞

李 銓國

韓国材料学会 会長

韓国科学技術研究院(KIST) 責任研究員

韓国科学技術連合大学院大学 教授

(2019年7月23日受理)

日本材料科学会の一般社団法人化を祝います。  
材料科学関連の研究者の集まりとして、材料研究の新しい方向性を提示することができる学会に生まれ変わることを信じます。  
これまでの小さな集まりから抜け出し、法人団体として新たに出発する御学会のさらなるご発展を願っています。  
今後、様々な材料関連の研究分野や国との学術的交流の場になれることを祈っています。  
法人化のためにご苦労されたすべての関係者の方々の努力が無駄にならずに、大きな実を結び、関連学会の発展にも大きく役立つことが出来る学術団体になること願います。  
夏の本番の季節7月には、すべての会員の方々の学術活動を通じて、すべての幸せを願います。  
改めておめでとうございます。

일본 재료과학회의 일반사단법인화를 축하합니다.  
재료 과학 관련 연구자 모임으로서 재료 연구의 새로운 방향을 제시할 수 있는 발전적 학회로 거듭날 줄 믿습니다.  
그동안의 작은 모임에서 벗어나, 법인 단체로 새롭게 출발하는 귀 학회의 무궁한 발전을 기원합니다.  
향후, 다양한 재료 관련 연구 분야와 국가와의 학술적 교류의 장이 되길 기원합니다.  
법인화를 위해 수고하신 모든 관계자 분들의 노고가 헛되지 않고, 훌륭한 결실을 맺어, 유사 관련 학회의 발전에 큰 도움이 되는 학술단체 되길 소원합니다.  
녹음의 계절 7월, 모든 회원 분들 학술 활동을 통해 모두 행복하시길 바랍니다.  
다시 한번 축하합니다.

## 祝辞

金 亨泰

韓国セラミック技術院(KICET) 首席研究員

韓国セラミック学会 副会長

(2019年7月31日受理)

一般社団法人日本材料科学会の設立を心からお祝い申し上げます。  
1963年から50年以上、学会を支えてこられた会員の方々の努力に感銘を受けました。  
皆様のご苦勞で日本の材料科学は華々しい発展を遂げてきたと思うところであります。  
私は過去10年間、東京などで開かれてきた日本材料科学会の学術発表会やイベントに参加し、各分野の先生の方々の研究への熱情と若い科学者たちの積極的な意志にいつも感心してまいりました。  
また、56号を上回る学会誌を執筆し、編集してこられた会員の方々、本当にご苦勞様でした。  
物質・材料・素材を研究する材料科学は工学の基であり、産業の発展の原動力でもあります。そして、これから私たちの社会を変えていくエコ・フレンドリーや第4次産業革命に於いて、材料工学の重要性は欠かせないものになるでしょう。  
一般社団法人日本材料科学会のこれからの更なるご発展を心からお祈り申し上げます。  
韓国と日本、両国間での材料科学の交流と明るい未来のために一緒に頑張っていきたいと思っております。

## 一般社団法人化にあたって

高橋宏行

日本電子株式会社 SI 販売促進室 室長

(2019年7月16日受理)

拝啓 貴学会におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

このたび貴学会が一般社団法人化されましたこと、心よりお慶び申し上げます。

長年にわたり学会員の皆様が研究と技術の発展や、産学官連携の推進などとおして、材料科学に関する理論の進歩および技術の向上にご尽力され、多大な貢献をなされてきたことに、あらためて敬意を表します。

弊社は、貴学会の活動のひとつである『材料科学基礎講座』において、走査電子顕微鏡を用いた操作実習などのお手伝いをさせて頂いております。材料科学における機器分析の重要性を、機器メーカーの立場で紹介させて頂ける貴重な機会であり、このような機会を頂き誠にありがとうございます。今後も弊社といたしましても材料科学の技術向上に微力ながら尽力してまいります。

最後になりますが、あらためまして日本材料科学会様が今後ますます大きく発展し続けることをお祈りいたします。

## ものづくりの基盤である材料科学

金森元気

(株)オジックテクノロジーズ 取締役 技術本部長

(2019年7月16日受理)

この度は、一般社団法人 日本材料科学会として新たなスタートをお迎えになられたこと、心よりお祝い申し上げます。私が本会を知ったのは、日頃お世話になっている大学の先生から薦めて頂いたのがきっかけでした。

昨今、機能性、生産性、環境性能の向上を目的とした新材料の開発がものづくりの分野を問わず世界的に活発になっております。また、その新材料が使用される周辺部品材料や技術開発も同様に急ピッチで進められております。その結果、電子機器の小型化、高性能化が実現され、我々の生活がより便利に、より豊かになっております。そういった意味では、材料の進化がものづくりのベースを担い、生活や産業の発展に大きく貢献していることは間違いありません。

しかしながら、様々な目的があって開発された新材料であるため、材料に関する知見が少なく、材料を使用し追加工、後加工をする側が苦勞する事は少なくありません。ケミカルプラントとして機能性めっきや精密電鍍、化粧品原料を世界へ提供する弊社の状況も例外ではなく、自社の技術と新材料を融合させるのに苦勞する事が多々あります。

そのような時によく活用するのが学会誌などの外部の情報になります。本会誌である『材料の科学と工学』では半導体、電子機器から宇宙開発、バイオマテリアルまで様々な分野で活用される材料の研究が数多く掲載されております。そのため、各分野での注目材料がどのようなものでその特徴や性質、想定される用途などを把握出来るのがこの学会誌の特徴だと言えます。また、学術講演大会などの成果発表の場では国内外問わず専門分野の異なる方々が活発な意見交換をし、研鑽する姿が印象的でした。異業種との交流・連携を重要視する大学や企業が増えてきている現在、ものづくりの共通項である材料科学に注目し、活動する本会は今後のものづくりをリードしていく存在であると考えております。

その意味におかれましても、これからも会員の方々为本会を盛り上げて頂くと思うところであります。

最後になりますが、一般社団法人 日本材料科学会が今後さらに内容を充実され、著しい発展を遂げられることを祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 日本材料科学会法人化に寄せて

株式会社第一機電



(2019年8月19日受理)

このたびは、一般社団法人日本材料科学会ご設立の運びとなり、誠におめでとうございます。これを機に、材料科学の分野、またそれに関連する分野におきましても、貴学会の活動がますます活性化されますことを期待いたします。

弊社は、高周波誘導方式を中心に様々な加熱方式で、結晶材料、金属材料、セラミックスなどあらゆる材料を対象とした加熱炉をご要望に応じて設計・製作する、社員50人足らずの小規模メーカーです。小規模が故の小回りの効く営業活動を行い、高温加熱技術で新たな価値を提供することを心がけております。

貴学会と弊社の関わりは、故人となられました石井満先生が弊社の顧問を務めておられた頃に端を発し、現在も引き継がれております。先に述べました通り、弊社はあらゆる材料を対象物として加熱、育成、加工することが必要とされておりますので、材料科学とは深く関わりがございました。今後とも微力ながら貴学会の活動に関わり、また、相互に発展できますよう貢献できれば幸いと存じます。

最後になりますが、一般社団法人日本材料科学会のより一層のご発展を祈念しましてお祝いの言葉とさせていただきます。



## 祝辞

田中一平

兵庫県立大学 助教

(2019年7月19日受理)

このたびは、一般社団法人日本材料科学会が本年4月より一般社団法人として法人化されたことをお祝い申し上げます。

また、貴学会誌「材料の科学と工学」に祝辞を掲載する機会をいただき光栄に存じます。

私はプラズマ技術を用いた炭素系薄膜の合成と薄膜の摩擦・摩耗特性の評価に関する研究を行っており、学生時代より貴学会学術講演大会での研究発表や貴学会誌への論文発表といった形で貴学会の学会活動に参加して参りました。右も左もわからぬ学生であった私ではありますが、貴学会ではセラミックス、ポリマー、金属に関する幅広い材料研究者の方々からご指導いただき、貴学会学術講演大会の研究発表において奨励賞をいただいた際には、喜びとともにさらに研究に精進しなければならぬと感じました。若手研究者討論会では、他の学会では交流の少ない分野の方々との交流を深めることができ、材料科学に関する幅広い知識を深めることもできました。現在では編集委員の1人としても学会に携わらせていただいております。まだまだ若輩者ではありますが今後も会員の1人として微力ながら貴学会のさらなる発展に協力する所存です。

貴学会は今後も材料科学の発展や若手育成に尽力され、法人化に伴い学会活動も幅広くなっていくと存じますが、ますます多様化する学術・科学の深化に対応し、学術、産業界に対してさらに貢献していくことを会員と一人として願っております。

結びとなりますが、一般社団法人として新たな門出を迎えられたことに心よりお喜びを申し上げますとともに、法人化に尽力なされた関係者の皆様に敬意を表させていただきます。

## 日本材料科学会の法人化に寄せて

大家 溪

工学院大学 教育推進機構 基礎・教養科 助教

(2019年7月23日受理)

日本材料科学会が法人化されましたこと、心よりお祝い申し上げます。私が本学会で活動させていただいている間、本学会の法人化は長年の目標であると伺っておりました。それが実現され、私も大変嬉しく思っております。

私は2010年度から本学会にお世話になるようになり、今年度で10年目となりました。私は主として「生体材料」に関わる研究に携わっており、本学会においては2013年度まで実施された「医用・生体材料分科会」や、2018年度から実施されている「インフォマティク・バイオマテリアル研究会」の2つの生体材料に関わる分科会のメンバーに加えていただき、活動させていただいております。

私たちの身の回りには多種多様な材料があり、私が専門とする生体材料の他、例えば宇宙・航空機材料、各種プラント材料、建築材料、環境・エネルギー材料など、枚挙にいとまがないほど材料の種類と用途は多岐にわたっています。そして、本学会の会員は「材料」というキーワードで繋がっており、多様な専門家が集まっています。一見、分野違いの専門家の集団でまとまりがないように見えるかもしれませんが、本学会は分野間の垣根がなく、学会活動を通じて多様な専門家と学術講演会や会議で議論したり、ときには懇親会で杯を交わしながら議論することができます。私は学位取得後まもなくから本学会にお世話になるようになり、最初はどのように専門外の先生方と接したらいいのかかわからず戸惑いましたが、会員の皆さんは大変気さくで、いつの間にか打ち解けてお話ができるようになり、専門を超えて研究の相談もできるようになりました。大学や研究機関の教員・研究者と大学院生・大学生が議論できる機会もあり、大学や世代の枠を超えた幅広い交流ができています。現在、私は異分野融合にも興味をもって研究に取り組んでおりますが、そのきっかけを得たのも本学会でした。

私は現在、評議員、編集委員会委員、第一企画委員会委員も仰せつかっており、本学会でのさまざまな活動を通じて大変貴重な経験をさせていただいていることに感謝しております。本学会の益々のご発展を祈念いたしますとともに、これからも本学会の発展に貢献できるよう、自身の研鑽に努めていく所存です。

E-mail : oya@cc.kogakuin.ac.jp URL : <http://www.kogakuin.ac.jp>

## お祝いに代えた「活動報告」と思い出

神原陽一

慶應義塾大学 理工学部 准教授

(2019年9月4日受理)

平成の終わる直前に、一般社団法人を発足に至ったこと改めてお祝い申し上げます。私は19年前に人生初の口頭発表を任意団体であった本学会にて行っています。当時の学生にとっては、その約20年後に祝いの文を寄稿するまでの関わりが生じるとは予想していませんでした。現在は事業の一部を担当し、楽しく活動しております。

前述の通り、私と日本材料科学会との関わりは2000年5月26日の学術講演会口頭発表に遡ります。当時、存命であった坂田亮先生（慶應義塾大学名誉教授）に電気伝導率の定義について助言を受けた人生最初の発表でした。人生最初の発表から12年経過した2012年6月1日に、卒業研究を指導した学生の引率としての本学会に関わりました。この年、3件の登壇申し込みを行った内、1件の発表を断念することになりました。当日は、当該セッションで座長を務められていた大越昌幸先生（防衛大学校教授）にお詫びとともに「発表取り下げ」を伝えました。「機会を活かせない学生」もいると学んだ出来事です。この時の会話が切掛けとなったのか、その後、学会スタッフとしての活動を開始しました。2014年から第一企画委員会（現在は、学術講演大会企画委員会）に参加し「1日以内で会場準備から撤収、並行して理事会、評議員会をこなす」事務局による見事な段取りを学びました。2015年から、現在も関わっている日韓材料科学シンポジウム（JKMST）にて発表と国際交流委員としての活動を始めました。この年のJKMST2015で初めて会話をしたKWON Do-Kyun先生（韓国航空大学校教授）には今年、定山溪で開催したJKMST2019の直後に日本材料科学会「第6回マテリアルズ・インフォマティクス基礎研究会」での出講を引き受けていただきました。お祝いというよりは、これまでの活動報告文書となりましたが、ここ5年ほど、学会の枠組みを利用して私自身の研究・教育生活の糧としていたのが本音です。今後も会員や事業内容の入れ替わりがあるかと思いますが、私は現在の立ち位置で関わっていく予定ですので、よろしく願い申し上げます。

E-mail : [kamihara\\_yoichi@keio.jp](mailto:kamihara_yoichi@keio.jp)

URL : <https://sites.google.com/site/2010mklab/>